
愛の印

朝霧弥生

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の印

【Nコード】

N4927D

【作者名】

朝霧弥生

【あらすじ】

俺の彼女、愛花との関係は体のみで繋がるもろいものだった。俺たちの間には愛というものは存在しなく、冷めた関係のまま進んでいくのだった。

一話（前書き）

少し性的表現があるかもしれませんが。
一応それがメインなんで。

一話

俺と彼女が付き合いはじめたのは大学へ入学して、数ヶ月後。たまにたま専攻が同じで、彼女が隣の席に座ったのが偶然だった。

彼女からは甘い、母性を引き立てるような香水の匂いがしていた。不覚にも、彼女を母親に照らし合わせていたのだった。

抱きたいとか、キスしたいとか、セックスしたいなどという考えが授業中、頭の中で渦巻いていた。授業なんて、まったく頭に入らなかった。

頭の中に俺の思考を妨害させる、白い何かが取り巻いていてその時の俺は空に浮かんでいるようだったのを今でも鮮明に覚えている。

話しかけてきたのは、彼女の方だった。

授業が終わり、チャイムが鳴ってからしばらくして頭の中の白いものをようやく振り払って、席を立とうとした時だった。

「あなた……私に惚れたでしょう？」

しっかりとした口調に、優しい響き。

俺は一瞬何のことだと思って、辺りを見回した。彼女が俺に話しかけたのということに気づくのに、何十秒もかった。

「俺……？」

何かの聞き間違いなのではないか。

それにどうして彼女は俺の心が読めたのだろうか。

惚れた、のではなく思った、という言葉が正しいだろう。

別に彼女に好きという感情じゃなくて、ただ性行為を試してみたい、と思ったただけだ。

彼女は、薄青のワンピースを体に流れるようにまとい靴は、白い、花のついたそんなに高くないハイヒールを履いていた。

長い黒髪に、透き通るような白い肌。そして薄く口紅がつけられた唇。

好みじゃない、といったら嘘になる。

でも、どうしてか俺は彼女を体でしか求めていなかった。

俺は首を横に振る。

彼女は口元に小さな笑みを浮かべる。

「冗談。……でも、嫌らしいこと考えていなかった？」

凶星。

顔が真っ赤に染まってしまふ。

「そんなに照れないでよ。別に私は気にしないわ」

「でも何でわかったんだ？俺、何か変な顔していた？」

彼女は首を横に振る。彼女の動作にはいちいち無駄がない、おそらく社交性のない俺みたいな人間じゃなくて、社交性のある人なんだろう。

「してないわ。あなたの顔は無表情だったわ。まったく驚いちゃう授業中、嫌らしいこと考えていたのに、まったく表情一つ変えないのだから」

「でも君は怒らないんだ？誰だって体なんか想像されていたら嫌だろう？それにどうして俺が君ことを考えていたことがわかったんだ？」

彼女は足を組む。

ワンピースから少し見える、彼女の白い肌。無駄毛はまったく生えていなかった。

彼女が動くたびに香水の匂いが俺の鼻を刺激する。

「ふふふ……だって私も想像していたもの。あなたの体」

驚いた。

男が女の体を想像するならまだしも、女が男の体を想像するなんてあんまり聞いたことがない。それとも彼女だけではないのだろうか。

「私とあなたは互いの体を想像し合う……。あなたの考えが読めたのはなんとなくかしら？」

俺は彼女がこんなことを考えているなんてまったく気づかなかった。

「でも、どうして俺の体を？」

「あなたって結構かつこいいじゃない？それに、私の好みだから」

「俺はかつこよくなんか……」

少し照れた。

中学、高校と何回も女子に告白されたことがあったけれどもここまで照れたのはきつと、はじめてだろう。

「照れないの。……で、迷惑かもしれないけど……」

彼女はいったん言葉を切る。

本当に動作も、言葉も無駄がなかった。

「私と寝てみない？」

これが、俺と彼女が付き合いだしたきっかけ。

彼女の名前は南 みなみ 愛花 あいか。

俺と同じ学年で、考古学を専攻している。

彼女と付き合いだしてもう、数年たった。彼女とはデートなどをしたことはなく、ただ一緒にラブホテルに行って寝るだけ。

俺は別に不満じゃないし、彼女だって不満じゃないはずだ。

お互いに欲求するのは体だけで、他には欲求しない。

傍からみれば冷めた関係だと思われるかもしれないけれど、俺たちは十分に上手くやっていた。それ以上の関係も、それ以下の関係も必要なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4927d/>

愛の印

2010年10月21日21時55分発行